

### 巻頭インタビュー

## 気象変化の真相は依然ナゾ

——地球温暖化の不安を吹っ飛ばすような厳冬ですね。これも異常気象？

住 気象はゆるぎのですよ。長期的には地球は暖まっている、という判断は正しい。今回は昨年十一月下旬から起こった北極寒気団の南下を兆候段階でつかめなかった。

——「北極振動」というのだそうですが、それは何ですか。

住 北極にたまっていく高気圧の、つまり冷たく重い空気の大きな塊が南へと流れ出す。代わりに南の暖かい空気が北極に入り込む。そういう空気の出入りのこと。だから、今冬の北極は「温暖化」ですね。

——気象庁の三カ月予報は「この冬も暖冬」でした。こういう食い違いは社会的影響が甚大ではないですか。

住 現在の予報技術では、三カ月前に北極気団の動きなどの大気循環のカーブをつかむのは困難です。スーパーコンピュータが登場し数値モデルが大きく進歩した今でも、まだわからないことは多い。こう言ってはミもフタ

もないけれど、「自然ですら将来の天気を知っているわけではない」かもしれない。まあ「一週間前」だったら、かなりの確度で予報できます。

——一方で台風、豪雨など夏場の気象変化はよく当たります。

**INTERVIEW**

**住明正**

(東京大学気候システム研究センター教授)

1948年岐阜市生まれ。東大大学院理学研究科修士課程修了。気象庁予報部、ハワイ大学気象学教室助手などを経て85年、東大理学部助教授。91年より現職。理学博士。著書に「地球温暖化の真実」など。98年日本気象学会藤原賞受賞。



の暴威……やはり異常気象ではないですか。

住 異常気象というのは大体三十年に一度くらいいしかならない常ならぬ天候というのが定義です。だが、それも自然界がくり出す気象のゆらぎの範囲に入るという意味では正常気象です。

——温暖化の影響ではないのですか。

住 人間の温室効果ガス排出で確かに大気温度は暖まっています。大気中のCO<sub>2</sub>は産業革命以前に比べ約一・五倍になっています。平均値で0・六度ほど上がったでしょうか。しかし、これが気候の変化に決定的な影響を及ぼし始めたという証拠はありません。我々の知らないメカニズムが存在している可能性も否定できません。

——お話を聞きますと、温暖化をあまり心配しても仕方がないような……。

住 それは違うでしょう。温暖化そのものは自然現象ですから、人類社会が絶滅しても良いのならばいいかもしれません。これは、気象学の問題よりも人間の生き方、社会のあり方を考える問題です。地球は今、明らかにオーバークリッピングを酷使している。地球と人間社会が持続的に共存できるような全体のデザインが大事なのです。先進国の現代人のように、やれグルメだ、それクルマだと贅沢を求めるのが人間の本来の生き方なのか考えるべき時だと思えます。

——気象学者からそんな話をうかがうとは思いませんでした。

住 いや、研究者も研究する前に一人の人間ですから。自然科学者として温暖化の問題に携わるとしても、人間の生き方の問題を考えざるを得ない。私はフリーターの生き方に注目しています。あくせく働かない。少ないカネで充実して生きていける。自然の摂理を知っている可能性があるかもしれない。インタビューア・伊藤光彦